
—Greed—

ふじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

— Greed —

【Nコード】

N 6 9 2 7 Y

【作者名】

ふじ

【あらすじ】

主人公は異世界に落ちた。そこはゲームのような世界だった。

その世界には塔が建っておりその頂上には神がいて全ての階層をクリアすると神様が1つだけ願いをかなえてくれるという。主人公は元の世界に帰るため塔の攻略を目指す。

01：異世界トリップ

「待てやゴラアアアアアアアア！！！！」

「待てって言われて待つバカがいるかよ！！！」

どうしてこうなったんだろうか？

時間は数分前に遡る。

俺は何時もどおりに寝坊して、遅刻しないためにダッシュしていた。近道である普段は使わない滅多に人が通らない薄暗い裏路地を走っていると前方に普段は無い物があつた。

スキンヘッド

禿の塊である。よく見ると禿たちは1人の少女を囲んでいるようだ。嫌がる少女を禿たちが無理矢理連れて行こうとしているのである。少女は俺と同じ制服を着ているので同じ学校の生徒だろう。禿たちは私服やら他校の制服やらバラバラである。一緒なのは禿頭だけ。

「どーーーーんっ！」

俺はそんな間抜けな掛け声と共に1番近かつた禿の後頭部に跳び蹴りをかます。実はこの禿たちはたまにここでナンパしていて嫌がる少女を何度か助けたことがあるのだ。最初は話し合いで解決しようとしたが頭だけでなく脳みそまでつるつるのようであらう話を通じなかったので殴り飛ばしてしまったのだ。

それからというものの俺を見るたびに追いかけてくるのである。本当は関わりたくなかったが少女が襲われているのを見て見ぬ振りはできないのだ。

俺の渾身の跳び蹴りは見事後頭部に直撃し意識を刈り取ることができた。仲間がいきなり蹴り飛ばされて驚いている隣に居る禿の顎を蹴り上げこれまた意識を刈り取することに成功した。慣れれば簡単である。

ここでやつと我を取り戻した禿建ちは俺に一斉に殴りかかってきた。少女はそのうちに逃げ出した。俺は少女とは逆方向に走り出す。

そして冒頭に戻る訳だが、今日の禿たちは一味違う！いつもよりかなりしつこい。いつもなら数分で撒けるんだが、今日はなかなか粘る。俺は走りなれた道を何度も曲がり禿たちを撒こうとするがやはりついてくる。いい加減いらしてきた俺はまた角を曲がる。

そして曲がった瞬間俺は宙を舞っていた。

…え？

視界に移るのは真っ暗な闇、視線をずらすと一部切り取られたようにぽっかりと穴が開いている。穴の向こうは見慣れた家の屋根や電線。

どうやら俺は穴に落ちたようだ。

「ギャあああああああああ！！！！」

俺はつい叫び声を上げてしまった。

しかしこれは仕方が無いと思う。

穴はどんどん小さくなっていく。俺は落ち続けているのだ。

しばらくして完全に穴が見えなくなった。だんだん意識が薄れていくのが分かる。

落下しながら俺は意識を手放した。

ぺちぺちぺち……バツシイイン

「痛いわあああああ!!!!」

何かに思いつきり頬をぶたれて俺は意識を取り戻す。

なんという威力だろうか？ぶたれた右頬がかなり痛い。恐らく手形がついているだろう。

「うるさい！」

その声が聞こえると同時に左頬も同じ位の力でぶたれる。こんな短い時間で両方の頬をぶたれたの初めてである。

熱を持った両頬を押さえながら声の聞こえた方を向くとそこにはかなりの美少女が居ました。美少女です。大事なことなので2回言いました。

背中まである真っ直ぐなかなり薄い水色の髪。目じりはつりあがっており強気な印象を受ける。

「えっと…ここはどこですか？」

「私の家の裏庭よ」

「俺はどうしてここに居るんですかね？なんか服が濡れてるんですけど？」

「川から流れてきたんだから当たり前じゃない。」

「俺が川から流れてきたんですか？」

「そうよ。私が助けてあげたんだから感謝しなさいよね！」

そう言って少女が胸を張る。ペタンコでした。

それは置いといて、なぜ俺は川に流されていたんだろうか？俺は学校に向かっていていた筈で、禿たちから少女を助け穴に落ちた。そう

だ！あの穴なんだっただ？俺は何で街中にいたはずなのに川なんかに流されているんだ？

俺が色々考えていると、急に意識が遠のいていくのが分かった。

「ちょ、ちょっと！どうしたのよ！」

少女が何か叫んでいるがそれに耳を傾ける余裕なんて俺には無かった。

俺は知らない場所で目が覚めて数分でまた意識を失うのだった。

次に目が覚めた場所は真っ白な部屋だった。天井、床、壁全てが真っ白で汚れ1つ無い。広さは大体6畳位だろう。窓も無い、家具も何も無い。部屋と言うよりは白い箱の内側といった方がしっくりくる。キョロキョロと辺りを見回していると突如後ろから声かけられた。

振り向くとそこにはぼんやりと光る白い球体が浮かんでいた。声はこの球体から聞こえてきた。

「やほー私は神様ー。不運な君に会いに来ましたー。」

若い女の声だ。やけにテンションが高い。

「聞きたいことはある？何でも聞いてよ！」

「じゃー貴方のスリーサイズは？」

「上からはちじゅ…ってバカー！恥ずかしいじゃない！」

怒られてしまった。何か間違えたんだろうか？

「大間違いだよ！何でこの状況で私のスリーサイズなの！？もっと他に何かあるでしょう！」

俺声に出してたかな？それにしてもよく喋るな。何者だ？

「私は神様だよ。そして私は神様だから人の心を読むなんて朝飯前なのさ！」

「へえゝまあそんなことは如何でもいいいでそろそろ質問してもいいですか？」

「何でも聞いちゃってちょうだい。」

俺は取り合えず1番気になっていることを聞いてみることにした。

「ここってどこなんですか？」

「ここは、私が君のために急いで造った空間であなただが元居た世界でも今居る世界でもない場所なの。まあ簡単に言えば君は異世界に来ちゃったから私はその説明に来たよって感じ。分かった？」

さっぱり分からんがな。異世界だと？

「異世界だよー。君変な穴に落ちたでしょ？あれは世界にたまーに空く穴なんだ。私はその穴の発生を防ぐ仕事もしてるんだけど間に合わなかったんだ。その穴に運悪くあなたが落ちちゃったって訳。それでも偶然近くにあった別の世界の穴に落ちたのは幸運だったと言えるかな。もしもそこに落ちなかったら一生世界の狭間で彷徨い続けることになったからね。」

自称神様の言葉は真実だと思わせるような何かがある。恐らくさっきの少女は異世界人なのだろう。よく考えればあんな髪の色した日本人なんて滅多にいない。

「あんた神様なら俺を元の世界に戻すこと出来るんじゃないのか？」

「無理ね。私はあなたが今居る世界の神じゃないから直接干渉は出

来ないの。今だって貴方の体はここに無いの。今は精神だけ連れてきたのよ。」

俺は途中から話なんて聞いていなかった。帰ることが出来ない。俺を絶望させるにはそれだけで十分だった。思わず泣き出す寸前まで神が話しかけてきた。

「ちょ、ちょっと泣かないでよ！確かに私が返すのは無理だけど返れないわけじゃないから！ちゃんと方法あるから！」

神が慌てている。球体もピコピコ点滅している。

「俺は帰れるのか？」

「もちろん！その世界には欲望の塔って言う塔があつてね、その頂上にその世界の神が居るんだ。その塔にはモンスターが居て、うえに行けば行くほど強くなる。そのモンスターたちを倒して最上階まで進めばその神様が願いを何でも叶えてくれるよ。まあ神様死ねーとか世界の消滅とか神様にとって良くないものは叶えてくれないんだけど、君の願いならぎりぎりセーフだと思うよ。」

「なんかゲームみたいだな。」

「そりやそうよ。だってその世界のモデルはゲームなんだもの。今君が居る世界の神様が私の世界のゲームを見て面白そうだって作ったのがその世界なんだもの。」

「マジか…」

そんな理由で世界を作るなんて…凡人である俺には理解できませ

ん。

「じゃーそろそろ時間だから私帰るね。あ、君の塔探索が有利になるようにいくつか特別な力を付けといたから。たぶんがんばれば攻略できるんじゃないかな？」

そう言い残して神と名乗った白い球体は空中に溶けるようにして消えていった。

あれ？俺はどうすればいいのかな？どうやってこの空間から出るんだろうか。そんなことを考えているとまた意識が薄れていくのが分かった。こんな短い時間に何度も意識を失うなんて人生初の経験である。嬉しくもなんとも無いが。

そんな感じで俺の意識は途切れるのだった。

目が覚めて最初に目に入った物は知らない天井だった。どうやらベッドに寝かされているようだ。服も変えられている。

ベッドから起き上がると同時に部屋のドアが開いた。

「あ！起きたのね。急に倒れるからびっくりしたじゃない。濡れた服も換えてあげたんだから感謝してよね！」

この子が俺の服を換えただと……？

「君が俺を着替えさせたの？まさか見た？」

俺はほぼ確信していたが念のため聞いてみた。

「え、あ、その…お、おつきかった…」

先ほどの強気な性格は何処へやら顔を真っ赤にして俯いてしまった。

ああ、何てことだ。異世界に来て初めて会う人に大事な部分を見られるとか恥ずかしくて死ねる！

俺も少女も何を話したらいいのかわからず気まずい空気が流れる。

俺はこの気まずい空気をどうにかするために少女に話しかけるとにした。

「助けてくれてありがとね。最初に出会ったのが君みたいなやさしい子でよかったよ。」

俺が笑顔でそう言うたとさらに顔を真っ赤にして走って部屋から飛び出してしまった。

何か間違えたのかな？

取りあえずベッドから起き上がり少女が出て行った扉から俺も部屋から出る。この部屋はどうやら2階だったらしく左には廊下がありいくつかの扉があり、すぐ右は階段になっていた。俺は階段を降りていく。階段を降りるとそこはリビングになっていた。テーブルと4脚の椅子があり、勿論テレビなどは無い。視線を左にずらすとキッチンがあり、先ほどの少女が大きめの鍋をかき回していた。

「今ご飯作ってるから椅子に座って待ってなさい！」

俺から話しかける前にそう言われてしまったので大人しく椅子に座ることに。

数分後、両手に2つのお碗を持って少女がやってきた。俺の俺の前におかれたお碗には野菜のスープが入っておりとてもとても旨そうだ。少女は2つのスープのお碗を置くとまたもキッチンに戻っていった。数秒で戻ってきた少女はパンの入ったかごを両手で抱えていた。それを俺と少女の席の間におく。

「助けてくれたのに食べ物まで貰って本当にありがとう。」

「うるさい！早く食べないと冷めるじゃない。せつかく作ってあげたんだから早く食べなさい！」

そう言っただけ少女はパンとスープをすごい勢いで食べ始めた。俺も

目の前のスープとパンを食べる。今日も寝坊して朝食は食べてなかったのでも腹が減っていたのだ。

スープはとてもおいしくて何度かおかわりした。パンは少し硬かったがスープに浸けて食べるととてもおいしかった。

食事中に自己紹介をした。少女の名前はリーンというらしい。ちなみに俺は風間集。こちら風に言うとしゅう・カザマ。どうやら苗字があるのは貴族などの上流階級の人々だけのようでリーンはかなり驚いていた。俺がなせ川で流されていたのか聞かれたが分からないということにした。自分の名前以外は何も思い出せないと言っておいた。この世界にも記憶喪失はあるらしくリーンは何とか納得してくれた。俺は名前以外は常識すらも分からないと言い。リーンに説明してもらった。

説明を受けた限りではこの世界は神の言っていた通りゲームのような世界だった。人々にはレベルがあり、スキルがあり、他にも色々あった。リーンにこれからどうするのかを聞かれたので塔を攻略して記憶を取り戻すと伝えたと爆笑された。俺は現在レベル1である。『ステータス』と唱えると現在の自分のレベルが見られると言われたので実際やってみたらマジで1だった。

それに俺には探索者（塔の探索をして稼いでいる人のこと）に必須といわれるスキルを持つていなかった。他には神様がくれたつばいものがいくつかあったがどれも戦闘向けではなさそうだった。

それでも俺はやめる気はなかった。一日でも早くもとの世界に帰りたいのだ。俺が何を言っても聞かないことを悟ったらしいリーンはなんと俺の塔探索を手伝ってくれるそうだ。

リーンも塔の探索を目指しているらしく、PTの仲間達と日々塔に挑戦していたらしいが、現在リーダーが怪我で治療中であり、PTでの活動は休止しているらしい。リーダーの怪我はそれほどひどくないので後3日ほどで活動再開するらしい。それまでの間なら俺の塔探索を手伝ってくれるらしい。理由を聞くと

「せっかく助けたのにすぐ死んじゃったら意味無いじゃない!」

だそうだ。やさしい子である。

俺がお礼を言うとリーンは皿を持ってキッチンに行ってしまった。

キッチンから「さっきの部屋貸してあげるから今日はもう寝なさい!」といわれた。母親かよ!と突っ込みかけたがぎりぎり抑えた。へんなことを言っただけで怒らせるべきではないと判断したのだ。窓の外はすでに暗くなっておりかなり長く話し込んだことが分かった。

腹も膨れて眠くなってきていたのでキッチンに居るリーンに「おやすみなさい」と声を掛けてから階段を登る。意外なことにリーンが「おやすみ」と返してきた。

俺は2階に上がってすぐのところのドアを開け先ほどまで寝ていたベッドに入る。

睡魔はすぐにやってきて俺の意識を奪っていった。

風間集ステータス

レベル:1

スキル:成長速度UP

レアドロップ率UP

思考発動

スキル効果上昇

02：買い物（前書き）

今回は短めです

02：買い物

現在俺とリーンは買い物に来ていた。買う物は主に俺のものである。

「買い物に行くわよ！」

朝早くにたたき起こされた俺が聞いた最初の言葉がそれである。俺は学校の制服で街中をリーンと歩いている。俺が着ている服が珍しいのか、リーンが美少女だからなのかは分からないが、かなり注目されていた。俺は始めての事で戸惑ったがリーンは慣れているのか全く気にしていなかった。

俺たちが最初にやってきたのはリーン行きつけの防具専門店だ。この店は値段の割に防具の質がいいのでなかなかの人気店なのである。2階建てになっていて1階が初心者向けで2階が中級者向けの防具を販売しているようだ。

俺が選んだのは皮製の軽い鎧だ。胸の位置に金属のパーツがあってそこだけ他の部分より防御力が高いようだ。肩はむき出しになっており腕の動きを阻害しない。箆手なども見たがほとんどが金属製で重く動かし辛かったので買わなかった。

リーンが防具屋の店主と交渉し3割引にしてもらった。店主が涙

目だったのは気のせいだろう。そうに決まってる。

次に向かったのは服屋だ。俺のこの世界での服は制服しかない。制服は運動に向いているとはいえないのでこんな装備で塔の探索などできない。

俺が得たんだ服はカーキ色の丈夫で動きやすい長ズボンと白い薄手のシャツを3枚ずつと丈夫そうなジャケット、つま先部分に鉄板が仕込まれた安全靴のようなブーツと下着類を買った。

リーンはここでも値切り交渉をしていて、今回の店主は完全に泣いていた。リーンはものすごくいい笑顔だった。

途中の屋台で買った串肉などを昼食にしつつ次の目的地である武器屋を目指す。いまさらだが、ここはランスロット王国という国の首都アロングタイトだ。塔があり常に人が沢山居るので道には屋台が並び毎日お祭り騒ぎなのだそうだ。

屋台で色々食べていたらいつの間にか武器屋に到着したようだ。武器屋は、先ほどの防具屋と同じで2階建てだった。俺はファンタジーの武器屋は個人で経営する小さな店のイメージがあったので結構驚いた。

この武器屋は1階が剣などの斬撃武器で2階がメイスやハンマーなどの打撃武器という風に分けているらしい。俺は鈍器に興味はないので1階の比較的安い剣が売っている場所へ行く。

俺はそれほど力が強い訳ではないので両手剣は無理だと思い、片手剣や短剣のコーナーを見る。

俺が手に取ったのは刃渡り50cmほどの片刃の片手剣だ。他の剣よりも一回り小さいので俺でも問題なく振ることができる。

他にも小さめの短剣を選んだ。

選んだものをリーンに渡すと軽い足取りで店主の元へ、今回は近くで見えていたが店主が余りにもかわいそうだった。リーンは片手剣に付いていた小さな小さな傷を店主に見せ、「この店は傷の付いた武器を客に売りつけているという情報を流す」と脅して値切らせた拳句、剣を吊るすためのベルトや剣の手入れをする道具一式をタダで手に入れていた。リーンさん恐るべし。

次の目的地へ向かう途中、「やりすぎじゃないのか？」と聞いたら「あれでも手加減した」と帰ってきた。本気を出したらどうなるのか気になったが怖くて聞けなかった。

途中立ち寄った雑貨屋で、消耗品を購入し、目的地を目指す。

付いた場所は「スキル屋」というところだった。

昨日リーンに言われたスキルを俺が1つも持っていなかったので買いに来たのだ。

店の中はいくつもの椅子とテーブルが並べてありテーブル1つにつき1つづつ分厚い本が置いてある。

リーンは誰も居ないテーブルのところへ行くと椅子に腰掛け分厚い本を持ち上げて開く。

「そんな所でボーッとしてないでこっち来なさいよ。」

そう言われたので近くにあった椅子を持って行きリーンのすぐ隣に座る。この位置なら一緒に本が見えるのだ。リーンの顔がなぜか赤くなっていた。

本には様々なスキルが載っていた。この本はどうやらカタログのような物らしい。俺はどれを選んだらいいのか分からないのでリーンに任せる。しばらくカタログとにらめっこしていたリーンだったが目的のものが見つかったのか店員を呼ぶ。

リーンが注文したのは【身体能力上昇】【イベントリ】【片手剣術】この3つだ。注文を聞いた店員はカウンターの奥へ引っ込んでいく。まるで喫茶店のようだ。

戻ってきた店員はなにやら箱をもってきた。箱の中には6つの窪みがあり、そのうちの3つに青い水晶のようなものがはまっている。

「ご注文の品でございます。ご確認ください。」

店員はそう言って持っていた箱をリーンに手渡す。

リーンはそれを見てうなずいてこう言った。

「安くしなさい！」

その後店員としばらく言い争いをしたが途中で店主が登場した。リーンが店主だけ聞こえるように耳打ちすると店主の顔が急激に青くなっていく。

「半額でいいわよね。」

「は、はい…」

店主は泣いていた。強く生きてっ！

俺が心の中で店主を励ましていると、清算を終えたリーンが戻ってきた。

リーンは先ほどの箱よりも小さい箱を俺に渡してきた。

中には3つの青い水晶が入っている。

「さっさと覚えちゃってよ」

「どうやって？」

そう言つと「ホント何にも知らないのね」という感じの視線を受けた。

「手に握つて“習得”つて唱えて。」

なんだかんだでちゃんと教えてくれるのでなかなかいい奴である。

「習得」

そう言つと握っていた水晶が碎け、俺に吸収されていく。

全部吸収し終わると体が少し熱を持った。それが収まると体がやけに軽く感じるようになった。

どうしてか聞くと、俺が今吸収したのが【身体能力上昇】だったらしく身体能力が上がったために体が軽く感じるのだそうだった。

すぐに残りの二つも習得してしまう。【片手剣術】は片手剣の扱いに補正が掛かるスキルだそうだが街中で剣を振り回せばあつという間に捕まってしまうらしいので試すことはできなかった。

【イベントリ】は個人用の特殊空間らしい。手ぶらでも沢山物が入れられますよーって奴だ。

試しに「イベントリ・オープン」と唱えると目の前に水色のウィンドウが現れた。これはステータスのときと同じだ。

出現したウィンドには特に何も書いてなかった。リーンに聞くと「買ったばかりだから当たり前」だそうだった。

リーンに教えてもらった方法で今日買った荷物をイベントリに入れる。入れるときは入れたいものを持ったまま「収納」と唱えるだけでいいので楽だった。

もう一度イベントリを開いてみるとちゃんと全部入っていた。

これで買い物は終わったらしく、リーンの家へと帰ることになった。

リーンが作った夕食を食べ、お湯で体を拭き（風呂は貴族や王族がたまに入るものらしい）寝巻き用に買った。シャツとハーフパンツに着替えて眠りについた。

風間集ステータス

レベル：1

スキル：成長速度UP

レアドロップ率UP

思考発動

スキル効果上昇

身体能力上昇

イベントリ

片手剣術

02・買い物（後書き）

ご意見・感想お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6927y/>

—Greed—

2011年11月21日12時12分発行